

&lt; 2017年 3月 &gt;

古賀 順子

## マルセイユの春

3月15日水曜日。マルセイユ快晴、最高気温21℃。曇り空のパリからTGVで3時間20分、マルセイユ・サン=シャルル駅からメトロで旧港へ、地中海の青空と太陽、水面に輝く船のマスト、ノートル・ダム・ド・ラ・ギャルド寺院が見護るマルセイユの街、春は始まっています。

今回のマルセイユは、日本の東横イン・ホテルがヨーロッパに進出し、視察旅行の同行です。日本全国に260店舗、韓国、ハワイにも進出しているビジネス・ホテル東横イン。ビジネスマンをターゲットにした東横イン・ホテルのコンセプトは、駅前、朝食込みの低価格、ハイ・シーズン、ロー・シーズンの変動がない安定料金、人件費がかかるレストランやカフェは作らない、宣伝広告にお金を掛けない・・・つまり、出張の多いビジネスマンが、宿泊費を最大限節約出来るホテル経営に徹底していることです。

3月14日、ドイツ・フランクフルト店がオープン。初日から満室、順風満帆の船出です。次いで、今秋、マルセイユ1号店をオープン予定、外観がすでに出来上がりました。フランス国鉄マルセイユ・サン=シャルル駅前で、空港バス・ターミナルにも近く、エクサンプロヴァンス、アヴィニョン、リヨンへ北上する高速道路インター側で、とても便利な立地です。マルセイユ市とヨーロッパ議会の再開発プロジェクトに参加する民間企業として、ホテル建設を進めています。ヨーロッパのビジネスマンにとっても、利用度の高いホテルになると思います。

現在、マルセイユは人口85万人、パリに続くフランス第2の都市。周辺地域を含めると、人口150万人を超え、南仏の政治・経済・文化の要所です。紀元前600年、古代ギリシア都市ポカイア人が、現在のマルセイユ旧港に辿り着き、「マッサリア」（マルセイユの起源）を築いて以来、マルセイユは、海洋貿易都市とし

て、大きく発展し続けて来ました。紀元後1世紀、ローマ人に侵略されながらも、東方諸国との自由貿易を続行。12-14世紀には、十字軍の拠点として栄え、18世紀初頭の人口は9万人を数え、保護貿易都市の頂点を迎えます。1720年ペストの大流行で、2年間で5万人が死亡しますが、伝染病が収まると、砂糖、コーヒー、カカオ、香辛料などが再び荷揚げされ、街では「マルセイユ石鹼」（サボン・ド・マルセイユ）、ガラス、織物、タバコ、陶器の工場が急速な勢いで発展し、巨大の富を生んだのでした。

中世の十字軍が、シリアのアレッポから作り方を持ち帰ったのが、「マルセイユ石鹼」の始まりです。オリブオイルと天然の炭酸ナトリウムを煮て、型に流して石鹼の出来上がり。1688年、ルイ14世が勅令を出して「マルセイユ石鹼」の名前が付けられました。1914年には、12万トンの石鹼(国内消費量の50%)がマルセイユで製造。しかし、2回の世界大戦と合成洗剤の普及で、「マルセイユ石鹼」は観光土産に転落してしまいました。

石鹼の歴史はさて置き、2600年の歴史を経た現在のマルセイユは、地中海都市に相応しく、様々な文化が共存しています。アルジェリア系10万人、コルシカ・アルメニア系8万人、コモリア系6万人を始め、モロッコ人、チュニジア人も忘れてはならない存在です。宗教分布も、カトリック教徒50万人、イスラム教徒20万人、アルメニア教徒7万人、プロテスタント教徒2万人と、モザイク社会を形成しています。

2013年「地中海文明の首都」と、マルセイユの都市改造計画が進み、「MuCEM」（ヨーロッパと地中海文明美術館）が建設され、湾岸整備が進み、街の様相は大きく変わっています。東横イン・マルセイユ店が建設される地区も、これから生まれ変わる場所です。1858年日仏友好関係が結ばれ、160周年を迎える来年、マルセイユにも日本のホテルが進出し、地元の雇用を生み、地元経済の活性化に役立つこととなります。観光だけでなく、地元の生活により密接した日仏関係の発信地になって欲しいと思います。